

アラウンド GOGO 55

バトンを離さず

福永ひろみ



いつの頃からか、歯を食いしばっていることが多くなつた。何気ない仕事をこなすにも力を込めなければ出来なくなつてきたのかも知れない。

*

私が20代の頃は、50代の先輩がすごく頼もしく見えた。あれから30年も経つて、私はどれほど成長できたのだろう?と首を傾げてしまう。

若い頃は、50代になつたら人生の積み重ねから少しは深い思考やゆとりある動きも出来るだろうなんて思っていた節もあつたが、とんでもない。子育てから解放された途端、振りかかつてきた親の介護、年々多忙化していく職場の中

で日々追われている私の生活は、ますます圧迫されている。

*

それでも元気を貰える源は、若い頃からずーっとライフサイクルの傍らにあつた多くの人たちとのつながりだ。

つい先日(3月2日)には、

「障害児・者家族のつながりを広める文化祭(通称つな文)」が開催され、県立体育館に市内周辺の障害児・者、家族やスタッフ1200人が集い、かつての同僚や教え子たちと再会できた。

3月末からは、障害児・者スキー教室「雪のつどい」で、志賀高原に行く。かつてはバス4台をつらね、160人を

超える参加者があつたツアーもここ数年は半減しているが、それでも盲・ろう・知的障害児学校の児童生徒、卒業生、家族が一同に白銀の世界に集う3日間は、雑多なことがらに埋もれた日常を忘れ、心をリセットさせてくれる。

*

和歌山の障害者運動を切り拓いてきた先人たちの取り組みは、今も若い世代に引き継がれ支えられている。このバトンの端くれを生涯離すことなく握り続けて行きたい。多くの人たちとの出会いや、ささやかでも運動にたずさわることが私のエネルギーの源だから。

何をするにも人より2、3倍の時間がかかつてしまう私。理想は高く掲げても現実とは大きくかけ離れてしまし、迷惑をかけていることもしばしば。それでも、懐かしい人や新たな出会いに勇氣や希望を与えて貰えるから、これからも多くの仲間と共に歩み続けて行きたいと思う。

(和歌山・特別支援学校)